

第6回 品川区学事制度審議会 会議録(要旨)

日 時:平成 29 年 3 月 16 日(木) 13:30~15:30

場 所:品川区立中小企業センター 大会議室

出席者:

委員	(出席委員) 名和田委員長、窪田副委員長、樋口副委員長、矢野委員、高林委員、三瓶委員、小宮委員、巻島委員、村田委員、秋廣委員、木下委員、矢田委員、佐藤委員、山口委員 (欠席委員) 保科委員
区側出席者	中島教育長、本城教育次長、品川庶務課長、篠田学校計画担当課長、有馬学務課長、熊谷指導課長、村尾教育総合支援センター長、木村品川図書館長、山本統括指導主事、中山企画部長、柏原企画調整課長、伊崎地域活動課長、若生学校計画担当主査

1 開会

2 委員長あいさつ

3 議事

(1)品川区立義務教育学校に関する学事制度等のあり方について

(事務局より説明)

委員:

- ・小中一貫教育を前提に考えるなら、義務教育学校の前期・後期の一貫と合わせて、その後期課程の学区域に入っている単体の小学校との一貫性を考え、単体の小学校から中学校段階で義務教育学校に入るのが前提となるようなカリキュラムの作り方や指導のあり方を基本としていくことが大事だと考える。
- ・そのような状態を理想とした場合に、人数構成やキャパシティがどうなるか具体的な数値を踏まえて議論したい。
- ・現状では義務教育学校の規模として極端な大規模校はなく、上記のシミュレーション結果が極端に大きくなるのであれば適正規模は優先して議論する問題ではないと思う。
- ・7年生段階で単体の小学校から義務教育学校に入ってくる子どもたちのスト

レスをどのように無くしていくかということが一番大事だと思う。

委員：

- ・ これからの品川の小・中・義務教育学校の一貫教育のカリキュラムをどうしていくかという検討においては、3校種体制になったが教育内容上は前倒しや入れ替えも含め区として同じ教育要領を作るという方向で進んでいる。
- ・ つまり、7年次にどこの学校に移ってもカリキュラム上は不利にならない状況を整えるということになる。

委員：

- ・ 義務教育学校の良さは1年から9年までを通して、大胆にカリキュラムをいじれることにあるが、現状ではその良さを出しづらい状況になっている。
- ・ 単体の小学校では、6年で一度区切りがつくため、そこで大きな目標をつくることができるという良さがある。
- ・ 義務教育学校のパッケージと単体の学校のパッケージを考え、その中で義務教育学校、単体の小学校、中学校それぞれの良さを出していくことが重要になる。

委員：

- ・ 義務教育学校の中でも後期課程の学区域に前期課程の学区域が入っていない地域があり、せっかく義務教育学校に入ったのに、7年次に他の中学校に移るという状況もある。後期課程のエリアに前期課程がきちんと入っているほうが子どもたちにとって望ましい。

委員：

- ・ 義務教育学校には、国の制度の特徴としてカリキュラムの前倒しなどができる特例がある。反面、それをすると単体の小学校から義務教育学校へ途中での入りにくくなってしまう。
- ・ 7年次の入学者数が以前より減ってきているという指摘があったが、減っている大部分は他校からの転入者である。これは義務教育学校に途中から入りにくいことを示しているのではないか。7年次で途中から入ると、カリキュラム上不利になるのではという保護者の危惧があるように思う。

委員：

- ・ 途中から義務教育学校に入ってくるときに特に心配することは、学習面よりも人間関係だと思う。義務教育学校で6年間一緒に過ごしてきたグループへ外から入ることに疎外感を感じて、転入しにくくなることは考えられる。

委員：

- ・ 親としてはどの学校に入れば上位の高校に行けるかなど、学習面を気にかけると思う。
- ・ 義務教育学校が近くにない地域の方は、義務教育学校に行くために学校選択をする必要があるため、それぞれの学校の特徴が大切になる。
- ・ カリキュラムは統一するとしても、学校が目指すところはそれぞれ違うので、特徴を明確にすることにより、義務教育学校の存在意義が出ると思う。

委員：

- ・規模が小さい学校の親の立場からは、義務教育学校に途中から入ることの不安が大きいと思う。品川区の公立学校だから、義務教育学校も同じようなカリキュラムで、途中から入ってもさほど変わらないというほうがよい。

委員：

- ・最近の学校選択状況を見ると、日野学園や伊藤学園ができた当初は、一貫校の学区域の子はほとんどが一貫校を選択していたが、最近では単体の中学校を選択するケースが増えている。これは、施設や制服など目新しい部分より、どの校種が合っているかを考えて選ぶようになっているからであり、狭い地域に多くの学校がある品川区ならではの良さだと思う。
- ・今後は、コミュニティ・スクールで地域と一緒にどういう学校にしていくかを考え作っていくようになる。その中で単体の学校がよいか義務教育学校がよいかを地域の方が選択していくというのが目指すべきところではないか。

委員：

- ・義務教育学校という校種の目指す姿と学区域の概念とがうまく結びつかないと思う。6校のうちひとつくらいは学区域という概念を取り払って義務教育学校の特色を生かすことを考えてもよいのではないか。

委員：

- ・義務教育学校は単独で小学校と中学校のパッケージになっている。もう一つは小学校2校くらいに中学校1校の単体同士のパッケージで、地域ぐるみでどんな一貫教育を根づかせるかという話になってくると思う。
- ・単体の学校と義務教育学校がそれぞれの良さをもっと打ち出せば、品川区が考えてきた教育の切磋琢磨も生まれると思う。

委員：

- ・中学校で私立中学に入れたいので、小学校は義務教育学校ではなく単体の小学校に通わせるという考えの親もいる。単体の学校の良さもあるのではと思うので、両方を活かしていく考え方を研究していく必要があると思う。

委員長：

- ・今後の義務教育学校の展開として、新設する場合には地域の方の理解を得ることが重要になるため、どこの地域で義務教育学校という選択肢を欲しいと思っているかを知ることが大切だと思う。

事務局：

- ・義務教育学校については、区では小中一貫校6校構想ということで進めてきて、6校全て整備が完了した。今後の義務教育学校については、地域の方々のご要望や受入体制など様々な要因に応じて、これまでの6校に限定することなく検討したい。簡単に進められる話ではないこともご理解いただいた上で、将来の可能性について審議会としてのお考えをお示しいただきたい。

委員：

- ・義務教育学校を学区域の制限を外しフリーにして独自の教育を行うことが可

能なら、都市型の小中一貫教育としては良いと思うが、それができない場合には、コミュニティに根ざした単体の小学校・中学校でペアを組み、それに見合うように学区域を設定していくことになると思う。

- ・ その場合、小学校のペアの相手となる単体の中学校が近くにない地域がある。
- ・ 学校の新設は義務教育学校に限定せず、単体の中学校も考慮してよいのではないか。

委員：

- ・ 義務教育学校7年生で他校から転入する割合が今後も減っていくとすれば、それは義務教育学校の独自性が理解されていることの表れかもしれない。そうであれば、1年生の時点で単体の小学校を選ぶか義務教育学校を選ぶかという仕組みを作り、親御さんたちに理解してもらうことが必要。

委員長：

- ・ 本日いただいた主な意見および個人的な感想をまとめたい。
- ・ 義務教育学校という選択肢と単体の小・中学校という選択肢が品川区では提示されて、どちらか自分自身や保護者がより適している方を選択できるようにすること。
- ・ それぞれの学校種が特色を出していく、また学校種の中で各学校が特色を出していくことが大事ではないかということ。
- ・ このような仕組みを前提とした場合、単体小学校から義務教育学校の後期課程に進む子が、きちんとついていけるような保証がある程度されていなければならないのではないか。そういった教育課程の仕組みを作ることが必要と個人的には感じた。

4 その他
特になし。

5 連絡事項
次回(第7回)は、4月19日(水)に開催予定。

6 閉会

以上